脳脊髄液に異型リンパ球が出現した水痘・帯状疱疹ウイルス髄膜炎の１例

◎谷村 満知子[1)]、吉田 桂子[1)]、今村 真治[1)]、塚口 扶美枝[1)]、木下 愛[1)]、林 裕司[1)]、池本 敏行[1)]
滋賀医科大学医学部附属病院[1)]

【はじめに】水痘・帯状疱疹ウイルス髄膜炎（VZV 髄膜炎）は，帯状疱疹に続発する髄膜炎・脳炎であり，発生頻度は帯状疱疹患者の 0.2～0.5%と非常にまれである．今回顔面の帯状疱疹に続発した VZV 髄膜炎を脳脊髄液細胞診にて経験した．ウイルス性髄膜炎での脳脊髄液に出現する異型リンパ球は悪性リンパ腫などと鑑別が必要となる．臨床症状や検査データとともに脳脊髄液の細胞像を提示する．また当院の B　細胞リンパ芽球性白血病(B-LBL)，急性骨髄性白血病（AML），びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫（DLBCL）との細胞形状や検査データの比較検討結果を提示する．【症例】年齢：70 歳代，男性，右側三叉神経第Ⅱ枝に沿って水泡形成を認めた．頭痛，吐気，頂部硬直を認めた為，髄膜炎疑いで入院となった．初診時検査データ：髄液検査：CSP-GLU 45 mg/dL，CSF-TP 64mg/dL，細胞数 99μL，単核球 95%，多形核球 5%，比重 1.005，髄膜炎脳炎パネル：水痘帯状疱疹（＋）．髄液細胞診所見：小型リンパ球とともに形質細胞様や幼若化したリンパ球の出現を認めた．【検討】髄液中に出現した B-LBL，AML，DLBCL の髄液生化学データと，各疾患の細胞質，核面積を 20 個測定した．【結果】髄液生化学データは疾患毎で大きな差は認めなかった．細胞質面積を①最大値，②第三四分位数，③中央値，④第一四分位数，⑤最小値（単位：μm^2）で表した．B-LBL（①236.6，②178.4，③149.5，④127.1，⑤108.6），AML（①185.6，②170.3，③157.3，④133.8，⑤113.3），DLBCL（①107.3，②73.4，③33.5，④24.3，⑤16.3），VZV 髄膜炎（①159.2，②140.9，③86.5，④71.2，⑤37.5）であった．核面積は各々の細胞質面積と同様のばらつきを認めた.細胞面積のばらつきを認めたのは VZV 髄膜炎であった．【考察】VZV 髄膜炎はウイルス感染によって反応性に変化した大小様々な異型リンパ球が出現する．今回細胞面積を計測し，反応性変化と腫瘍性変化を比較することで，出現するリンパ球の細胞面積のばらつきに明らかな違いを認めた．今後の課題は VZV 髄膜炎等の反応性症例を追加報告し，細胞診がウイルス性髄膜炎などの早期治療に貢献できればと考える．

滋賀医科大学医学部附属病院検査部‐077-548-2605